追加配付資料（矢野委員御意見）

○　「くらしの文化」として包括的に考えることは意味があるが、「生活文化」という用語に対する理解が多様であるところに問題がある。この語は戦後広まった（戦前に用例はある）ものであり、当初の学術的意味は、＜日常的生活から発し、文化として定着したもの＞という意味合いであった。しかし、厳密な定義があるわけではなく、辞書類でも掲載していない。

文部科学省（文化庁）の意味合いでは、「生活文化とは, 人が生活するに当たり限られた時間・空間・ものを使って織り成す暮らしのスタイルとでも言うべきものであり, 生活文化の展開の場は, 主として個人や家庭が考えられるが, 職場, 地域さらには国民生活全体や国際社会をも視野に入れて考えることが必要である。」となっている。
（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199301/hpad199301_2_031.html）
つまりは、広義な解釈というよりは、意味が変化して現在の日常生活における様態を主にみている。

この場合、すでに（室町時代に発して）芸術・芸能として確立している　茶道・華道・香道　は、むしろ　能・狂言　等と同等のものとして別枠のように考えられているといえる。それらは、確立したものから日常生活に降りてくる（取り入れる）と見るのであろう。決して、暮らしのスタイルとはいえない。

中学・高校の間に、能・狂言・歌舞伎・浄瑠璃のうち、授業の一環として実際に鑑賞しているのは、能が一番多いということは大学生への調査でわかっている。修学旅行でロンドンに行き大英博物館も観覧したという高校もあるが。だが、大都市周辺ではない場合は、地域の芸能を見に行く場合もあるようである。

また、継承という面でいえば、能・狂言・歌舞伎・浄瑠璃、茶道・華道・香道・連歌などはプロによってその内容が継承されている。これは、「暮らしのスタイル」ということとは一線を画すべきものである。もとより、資格をもってはいるが教授にはあたらないというハイアマチュアは、前者の芸能系に比較して後者が多い。茶道・華道・香道については、かつては教養としてある程度のレベルでは常識であったため、その名残としていまも両親の影響により（つまりは両親の日常生活での実践から）子に実践が引き継がれるケースも多い。その場合でも、きちんと受け止める余裕がない時代になっていることは確かであろう。

○　上記の引用にも、「国際社会をも視野に入れて」という文言がある。そして、国際的視野で正しく物事を見ることができるためには、自国の文化を正しく理解していることが重要であることは勿論である。自国文化の理解という基盤がなければ、単なる形式的な比較文化では皮相的になる例は、日本人の場合でも外人の場合でも枚挙に暇がない。

文化の継承という面において、これまで民間が行なってきたゆえに今後も民間（民活）にまかせておけばよい、ということにはならない。「暮らしのスタイル」に干渉するのは不適切であるというのはよいが、「生活文化」のような多義的な用語をもちいる場合は、その用法のその場での意味を明確にしなければ、議論がずれていくことを恐れる。

つまりは、＜生活文化＞という語の意味するところを、多義的であるならばなおさらその各々の意味を明確にしておかないと、同列で議論すべきものかどうかの混乱が起こる。ともかくも、本ワーキンググループの報告においても、異なる意味内容を同一の語で表現して、上部の部会で混乱をまねかないように留意する必要があると思われる。